

祓詞(はらひのことば)

一、三種祓

一、身禊祓

一、一二三祓

一、大祓(中臣祓)

三種祓(さんしゆのはらひ)

とほかみえみため

とほかみえみため

とほかみえみため

祓ひ給ひ清め給ふ

身禊祓(みそぎはらひ)

高天原に 神留ます 皇御祖神 伊佐那岐命 諸神御禊の 大み時に なりませる神

八十狂津日の神 大狂津日の神 神直日の神 大直日の神 底津海津見の神 底筒男命

中津海津見の神 中筒男命 上津玉積の神 上筒男命

および祓戸の 諸神々 諸々の 障穢を 祓ひ清むることのよしを 平けく 安らけく

御いさみたまひて 聞こしめせと ます

一二三祓(ひふみのはらひ)

ひふみよいむなやこともちろらねしきるゆゑつわぬそおたはくめかうを忽にさりへてのますあせえほれけ

大祓(中臣祓)

高天の原に神留座す 皇親神漏岐神漏美の命をもて 八百萬の神等を 神集に集給ひ 神儀

に儀給ひて 吾皇御孫の尊をもて 豊葦原の水穂の國を 安國と平けく所知食と 事依し

奉き 如此依し奉し國中に 荒振神等を 神問しに問し給ひ 神掃ひに掃ひ給ひて 語問

し磐根樹立艸の片葉をも語止しめて 天の磐座押放ち 天の磐戸を押開き 天の八重雲を

伊豆の千別に道別て 天降し依し奉き

如此依し奉し四方の國中に 大倭日高見の國を 安國と定奉て 下津磐根に宮柱太敷

立 高天の原に千木高知て 皇御孫の尊の美頭の御舎に仕奉て 天の御蔭日の御蔭と 隠く

座て安國と平けく所知食す 國中に成出る天の益人等が 過ち犯けむ 雑々の罪事咎崇

り 天津罪とは 畔放ち 溝埋 樋放ち 敷蒔 串刺 生剥 逆剥 糞屎 許々太久の罪を天津罪と

法別け 国津罪とは 生の膚斷 死の膚斷 白人胡久美 己が母を犯し 己が子を犯し 母と子

と犯し 子と母と犯し 畜犯せる罪 昆虫の災ひ 高津神の災ひ 高津鳥の災ひ 畜仆し蟲物せ

る罪を 地津罪と法別出して 許々太久の罪出む 如此出は 天津宮の事を以て 天津金木

を 本末打切て 千座の置座に置足はし 天津清麻を 本末荏断八津針に取り辟て 天津祝詞

の 太祝詞事を以て宣る 如此宣らば 天津神は 天の磐戸を押開き 國津神は 高山短山の

伊穂理を 撥別て洩るる処無く聞食さむ 如此聞食ては 種々の罪は 不在と 科戸の風の 天

の八重雲を 吹放ふ如く 朝夕の霧を 朝夕の風の吹拂ふ如く 大津邊に居る 大船の舳

艫の綱を解放ち 大海原へ押放つ如く 彼方や繁が本を 焼鎌の砥鎌を以て 打拂ふ如く 残

れる罪は不在と 祓ひ清むる事を 高山短山の末より 佐久良谷に水落 瀧壺早川の瀬に

流し座す 瀬織津比咩と云ふ神 大海原に 持出給ひてむ 如此持出給ひなば 荒潮の潮の

八百道の八汐道の 潮の八百會に座す 速開都比咩云ふ 神齧み呑みてむ 如此齧み呑では

吸吹戸に座す神 息吹放ち給ひてむ 如此息吹放ち給ひては 根の國の底の國に鎮り座す神

佐須良ひ失ひ給ひてむ 如此佐須良ひ失ひ給ひては 残れる罪は不在者ぞと 祓ひ申し

清め申す事の由を 天津神地津神八百萬の神等に 平けく安らけく 御いさみ給ひて聞食

せと申す